

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 80 号

平成 20 年 12 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

(柳生直行訳・ヨルダン社) より (7)

### 5 月 25 日 形づくる

ある夏のこと、北の地方のアバディーン近くをドライブしていたとき、ディネットという町にある、壁にはめ込まれた一つの石にわたしたちは出会った。日付は 1897 年になっており、なにかヴィクトリア女王と関係のあるもののようにであった。

その石には文字が書かれていて、わたしはそれを写し取ってきたので、ここで紹介しておこう。

役に立つように己れを形づくれ、  
壁の穴に合う石は道に捨てられはせぬ、  
やがて運命がなんじの丈を測り、いうであろう、  
なんじは使いものになる、  
わがためにこれをなせ。

形のない石は使い物にならず、捨てられたまま何の役にも立たず、ころがっている。ちゃんとした形のある石は、なにか建物にはめ込まれて一役を果たし、人びとはこれを覚えまた使用する。人生もまたそのようなものである。

この世のすべての人間にそれぞれ合った場所がある。

人はそれぞれ生ける石であって、神によってまた神のために、霊の家に築き上げられるもの、というふうに見たのはペテロであった（ペテロ第一、2・5）。神はご自身が建てつつある大きな建物に使う石としてわれわれを必要としたもう。

この世にはわれわれ一人ひとりにぴったり合った場所がある。神の計画と目的のためにわれわれ一人ひとりがなすべき仕事がある。

だが、石はその場所に合うように形づくられなければならない。

適当な場所を占めるためには、石は石工の鉄槌とノミによって一定の形に造りかえられなければならない。つまり、われわれは鍛錬されなければ、神のご計画のうちに自分の場所を占めることはできない、ということである。...

人生ははじめから終わりまでわれわれを形成しようとしている。

まず両親がわれわれを形成する。教師が形成する。だが、何よりも人生経験がわれわれを形成する。人生経験はそのためにあるのである。

「神は万事を益となるようにしてくださる」とパウロはいった（ローマ 8・28）。災難と思われるようなことですらも、われわれのためになるようにできているのである。

人が、形成されることを拒むのは、人生の悲劇である。

## 5月28日 幸福な顔と...

神はわれわれが楽しい心と幸福な顔をもって人生に対処することを望みたもう。

幸福であることはわれわれ自身に益となる。

箴言の著者は、欽定訳によると、「楽しき心はよき薬なり」といっている（箴言 17・22）。欽定訳の欄外を見るとつぎのような訳も出ている。「楽しき心は薬に益を施す」。これをモファットは、「喜びの心は人を助けまた癒す」と訳し、アメリカ改定標準訳は、「快活な心は良い薬である」としている。...

幸福な顔で人生にあいさつを送るたびに、われわれは自分の寿命を延ばしているのであり、また最高の良薬を服用していることとなるのである。

幸福であることは周りの人々にも益になる。

ロバート・ルイス・ステューブソンは、いっている、「幸福な人に会うほうが5ポンド札を拾うよりもうれしい」と。だが考えてみると、幸福な人は5ポンド札と同様、なかなか見つからないものである。...

ヨブ記は、世界の基（もとい）がすえられたとき、「かのときには明の星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」と語っている（ヨブ 38.7）。また詩篇記者は、「主の聖徒よ、主をほめうたえ」といっている（詩篇 30・4）。

その人のそばにいと、雨の日でも日光が射しはじめたかと思うような人がいる。かと思うと、夏の日太陽をさえ曇らせてしまいそうな人もいる。

人生もまたそう捨てたものではないという思いをもって別れることができる人、そういう人に出会うことくらい貴重な経験はない。

## 5月31日 心配するな

ものごとは実際に近づいてみると前とは全然違っているということがよくある。

遠くから見るとまったく不可能と思われる仕事も実際に直面してみると、不思議に可能となるものである。

とてもできないといていたことが、どうしてもやらねばならぬとなると、なんとかできるようになる、というのは全くふしぎである。困難なことと不可能なこととの違いは、不可能なことのほうが少しばかり余計時間がかかるというだけのことだ、とエジソンは言った。...

不可能と見たことも、いざやらねばならぬとなると、何とかやることができる 人生にはたびたびこういうことがある。これはわれわれに励ましを与えてくれるものである。

遠くから見ると解決不可能と思われる問題も実際に直面し解決せざるをえぬとなると、ふしぎに解決が見出されるものである。

クリスチャンは楽観主義者でなければならぬ。神の恩恵が彼のうしろ盾となっているからである。

耐えがたく見える将来の悲しみも、実際に出会ってみると案外耐えられるものだ。

人の不幸を聞き、それと同じことがわが身に起こったならとても生きていられまいと思うことがある。だが、不思議に何とか生きていかれるものである。

実際にぶつかってみなければ、どこまで耐えられるか、誰にも分るものではない。また神の助けがどのようなものであるか、実際に絶望の中から神を呼んで見なければ、分らない。

この問題に関するイエスの勧告は素晴らしい。「明日のことを心配するな。明日のことは明日に心配させるがいい。一日の仕事と問題は一日だけで十分である。」(マタイ6・34)

## 6月3日 波長

正しいことを聞こうと思うなら、それに正しく波長を合わせなければならぬ。

自分自身の心の声を正しく聞き取れば、波長を「誠実」に合わせるがいい。

自分に対して誠実である人は少ない。自分の欠点や感情に対して正直である人は、はなはだまれである。人の欠点はすぐに見つけるが、自分の欠点については、全く盲目である。...

他者の心の声を正しく聞き取れば、波長を「同情」に合わせるがいい。

人々が会話をしているときに、よくみられる奇妙な現象がある。かくいう私もしょっちゅうやってしまうのだが、それはこういうことである。相手が自分の経験や不幸や悲しみについて話していると、その話が終わるのを待ちきれずに、こちらがしゃべり出してしまふ。おれの経験のほうがずっと面白く、またおれの不幸や悲しみのほうがはるかに深刻なんだ、といわんばかりである。おそらく世の中で話し上手と聞き上手との比率は50対1であろう。この世でもっとも有用な人間は、こちらが心のなかを全部打ち開けることの出来るような、人の話をよく聞いてくれる人である。

この点で私たちが失敗するのは、同情心に欠けているためにほかならない。わたしたちは自分の気持や自分の問題ばかりにかかずらって、人の話を聞いてやる時間も欲求もないのである。

人と相対するときには同情が必要である。

神の声を正しく聞き取れば、波長を「謙遜」にあわせるがいい。

祈りに関して多くの人たちが犯す根本的な誤りは、神に語りかけることばかり考えて、神に聞くことをあまり考えないことである。わたしたちが語るよりも、神が語りたもう　これが祈りというものである。

## 6月4日 橋をかける人

非常にすぐれた教師でありまた神学者である人が、戦争中従軍牧師として奉仕したときの経験を語ったことがあった。軍隊では、従軍司祭は「神の人」と呼ばれることがよくあった、と彼はいう。当時の記憶や印象をふり返ってよく考えてみると、兵隊たちは従軍司祭から三つのものを求めていたことがわかる、と彼はいつている。

彼らは、自分を知ってくれて、個人としての自分たちに関心をよせてくれる人を求めていた。...

彼らは、自分たちの立場と苦勞を知ってくれる人を求めていた。

自分たちの問題、経験、誘惑について何も知らず、何も理解していない人間なぞ、彼らにとって全く無用であった。

エゼキエルは、神からの伝言を捕囚の人びとのもとに届けるためにやってきた。彼自身は捕囚の運命を共にする必要はなかった。にもかかわらずこういつているのである。「私はケバル川のほとりのテルアビブにいる捕囚の人々のもとに行き、彼らの坐っているところにわたしも坐った」(エゼキエル 3.15)「彼らの坐っているところにわたしも坐った」 これこそ人を助ける秘訣である。これこそ神がイエス・キリストにおいてなされたことである。

彼らは従軍司祭とは彼らに代って神に語り、神からのことばを彼らに語りうる人だと、考えていた。

従軍司祭は、兵隊たちの祈りと必要と要求を神のもとに持ってゆく人、また彼らの状況に適した神からの伝言を彼らのところに持ってくる人でなければならない。

これこそまさにもっとも偉大な仕事である。だれにせよこの仕事をやり遂げるためには、人びとに近く、また神に近く生きなければならない。...pontifex(大司祭)つまり神と人びととの間に橋をかけるものとならなければならない。

いま話したことは、...すべてのクリスチャンが同胞のためになすべき仕事として、考えなければならないことである。

## 6月5日 愛らしさ

A・J・ゴシップは大探険家マンゴ・パークのつぎの話がよほど気に入ったと見えて、よく引き合いに出したものであった。かつてパークは中国の荒れさびれた荒野を何日もの間旅していた。と、突然足もとに小さな水色の花が咲いているのに気がついた。それを見て彼はやさしくいった。「神がここをお通りになったのだ!」。これはイエスの感じておられたことと全く同じであったといつてよい。

愛らしいものはどこにでも見つかるものだ。もう一度 A・J・ゴシップのことばを引用してみよう。ゴシップはトーマス・ハーディの悲観的な人生観について、いつもこういつていた。ハーディは、青々とした草や色とりどりに飾られた野生の花にしきつめられた野原を見ても、それは眼に入らず、隅っこにある肥だめばかり見ていたのだ、と。

美しく愛らしいものはどこにでもある。空と雲、星と蒼穹、都市の街路からさえそれは見えるはずである。驚異の念をもって一心に見つめる子供の目、二人だけの幸福の世界に浸りきって、お互いのほかにはなにも眼にはいらぬといった様子で歩いている若い二人、だれかが私たちにしてくれた親切な行為、全然予期していなかったときに与えられる賞賛と感謝のことば、ふしぎなくらい美しい友情その他の人格的關係、等々。

世界が最悪の事態に陥り、わたしたちの人生が最悪の運命にぶつかったときですら、なお美しいものは残っている。私たちはこのことを決して忘れてはならない。美しいものを見、美しいものについて考えるのは、現実からの逃避ではない。とんでもない。美しいものを見たとき、わたしたちの心は三つのものへと動かされる。いやそのように動かされるべきである。

神の思いへと動かされる。...

感謝の気持へと動かされる。...

決断と行動へと動かされる。...

## 6月7日 聞き手

われわれが一つのことばを口にする。するとそのことばは外に出てゆく。「決して戻ってこないものが三つある。口から出たことばと、弦から放れた矢と、失われたチャンスと、この三つである」。

こんど口にするのにふさわしくないことをいおうとするとき、だれが聞いているか分からないということを、思い出そうではないか。

われわれが美しい、真実のことばを語る時、またイエス・キリストのために語る時、それをだれかが聞いている。

その古典的な例がジョン・バニヤンの経験である。ある日、ベッドフォードで彼は3, 4人の貧しい女たちが戸口の前にたって、日向ぼっこをしながら、話しているのを聞いた。そのころバニヤンは大変なおしゃべりで、信仰も見せかけ程度のものにしかすぎなかった。

「その婦人たちは、わたしなどとうてい及ばない、高い信仰的境地に達していた。その人たちは新生について、また神が自分たちの心を変えてくださったことについて、さらにまた己の義がいかに醜く、役に立たないものであるかについて、語っていた。まるで喜びが彼女らをして語らしめているかのようであった。そのことばは聖書のことばのように快かった」。

バニヤンの心は震い動きはじめた。彼が中途半端な信仰ではなく、徹底的な信仰を見出したのは、3, 4人の貧しい女たちが戸口でひなたぼっこをしながら話しているのを聞いたためだったのである。

われわれがしゃべることをつねに聞いている人がいる それはイエス・キリストである。

イエス・キリストはわれわれの語るすべてのことばを聞いていたもう。イエス自身こういっておられる。「よく聞くがよい。人はその語る無益なことばに対して、審判の日に申し開きをしなければならない。自分の語ったことばによって正しいとされ、また自分の語ったことばによって有罪とされるのだ」(マタイ 12・36 - 37)



## 6月8日 影 響

子供の幼い心にわれわれが注ぎ込んだものは、そのまま永久にそこにとどまるものである。

小さいときから、真実を尊ぶことを子供に教えるべきである。...

小さいときから、キリスト教的愛、キリスト教的思いやり、キリスト教的謙讓の意味を子供に教えるべきである。

夫婦のけんか、口論、批判、見解の相違　　こういうものをたえず子供に見せつけてはいないか。子供は知らず知らずのうちに、夫婦生活というのは一年中やかましくけんかすることなんだ、と考えるようになってしまうだろう。

わたしたちは、他人には決して見せない無礼な態度を、自分の子供には見せてもかまわない、と考えてはいまいか。キリスト教的謙讓とキリスト教的愛　　僕の家のお雰囲気それがそれなんだ、と子供が確信できるように教育していかなければならない。

小さいときから、神の日には礼拝をするように習慣づけるべきである。

たしかディック・シェパードだったと思うが、よくこういっていたものである。日曜日とはお父さんがお昼まで寝ている日のことだ、と考えるように育てられた子供が将来どうなるか、それを思うとゾッとする、と。

習慣の力ほど強いものはこの世にはない。教会への出席を守るには、これを習慣とするにしくはない。

毎日毎日わたしたちは子供の心に何かしら注ぎ込んでいるのであり、しかもそれは一度はいり込んだら消滅することがないのである。正しいこと、美しいこと、気だかいことをそこに注ぎ込むように注意しなければならない。

## 6月9日 死者は語る

ヘブル人への手紙の記者はあの素晴らしい第11章において、アベルについて「彼は死んだが、いまもなお語っている」といっている。これは多くの人についていえることである。

両親は死んでもいまもなお語っている。

何年も前に両親は死んだが、今日もなお自分の人生に最大の影響を与えているのは彼らである、と考えている人はたくさんいる。無意識にかもしれないが、われわれは両親に教えられた基準や原理を、自分の生き方や人生問題の決断に今もなお適用している。これも無意識にかもしれないが、自分がやったことについてわれわれは親の是認をなんとなく求めているのである。親が残してくれたこういうものを、われわれもまた子供たちに残していけるように、神に祈らずにはいられない。

亡くなった多くの教師がいまもなお語っている。

名もなき田舎の学校で埋もれた一生を送った教師もまた、その生徒の心のうちに生きつづけるのである。良き教師はわれわれの生にあって不死の存在となっているといつてよい。

多くの場合、友達は死んでもなお語っている。

大いなる友情の影響は死によって終わるものではない。…偉大な友人の影響は死を超越したものである。

多くの伝道者は死んだのちもなお語る。

いかなる伝道者も、自分が何をやっているかを知らず、自分のことばがどこへ、どこまで行くか知ってはいない。だが多くの人びとは、自分がこうして幸福に生きていけるのは、あの神の人なる誠実な伝道者の誠実な説教を聞いたおかげだと…考えている。

人間はすべて自分の一部を残してこの世を去ってゆくものである。人は死んでもなお語り続ける。ねがわくは、われらがこの世を去るときに、イエス・キリストのために語りつづけるなにか良きものを、残していくことができますように。